

## FACT SHEET

## 猫免疫不全症（FIV）とは？

- 1986年に初めて分離された猫免疫不全ウイルス（FIV）は、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）に近似のレトロウイルスです。猫科動物の多くがFIVに感受性がありますが、人には感染しません。
- FIVは世界中のイエネコで流行しています（ヨーロッパではサブタイプAとBが主体）。
- FIVの抗体陽性率は地域によってさまざまです。
- 病気に罹っている成猫、雄猫、自由外出の猫はFIVに感染する機会がもっとも高くなります。
- 宿主から離れ環境中にあるFIVは、急速に感染性を失います。また、一般的な石鹸などすべての消毒薬に感受性があり失活します。

## 感染

- FIV感染の大半は、持続感染の猫による咬傷（ケンカ、交配）が原因です。伝播のリスクは、社会性が維持されている室内飼育の猫では低いと考えられています。
- とくに母猫が急性感染している場合には、母親から子猫への垂直伝播が起こる可能性もあります。
- FIV感染猫は、抗体を上げたり細胞性免疫応答する能力があっても、持続感染となります。

## 臨床症状

- FIV感染には長期間の潜伏または無症候期という特徴があります。FIV感染猫は、一般的に数年間臨床症状が認められない状態のままであり、なかには発症しない猫も存在します。
- FIV感染が原因ではありませんが、免疫不全の結果とする多くの臨床症状が認められます。
- 典型的な症状
  - 慢性歯肉口内炎
  - リンパ節症
  - 慢性鼻炎
  - 体重減少
  - 免疫介在性糸球体腎炎を伴う腎不全

## 診断

- 低発生率または低リスク集団において、院内検査によってFIV陽性となった場合は、検査センターでかならず確認することが推奨されます。
- 検査センターにおけるFIV血清学的検査の“ゴールドスタンダード”検査はウェスタンブロット法です。
- PCR（プロウイルスDNA）検査は性能の点で結果がさまざまなため、血清学的検査に比べて信頼性が劣ることもあります。
- FIV感染の母猫から生まれた子猫では、移行抗体の持続によって抗体陽性を示す可能性があり、16週齢での再検査が推奨されます。例外として、6ヵ月齢までFIV抗体陽性となることもあります。

## 疾病管理

- FIV検査陽性という結果だけに基づいた安易な猫の安楽死は推奨されません。
- 適切なケアによりFIV抗体陽性猫も非感染猫と同様に長期間生存することが可能です。
- 攻撃性と咬傷事故の軽減のために不妊・去勢手術が推奨されます。
- FIV感染猫には定期的な（6ヵ月ごと）獣医師による健康検査を受けることが望まれます。この検査には定期的な血液化学検査や体重管理が含まれます。
- 急性、甚急性の二次疾患を診断することは必須事項となります。
- FIV抗体陽性猫はほかの患者と一緒に施設に収容することができますが、直接伝播する猫とは隔離し個別のケージにて飼育する必要があります。
- レスキューシェルターでは、交差感染を避けるために猫は個別に飼育する必要があります（少なくともFIV抗体陽性猫は隔離するべきです）。
- AZT（アジドチミジン）が使用されることがありますが、副作用が起こる可能性があります。
- 無症候のFIV陽性猫には手術を行うことができますが、経口の抗菌剤をすべての猫に投与するべきです。
- 猫に医原性ウイルス感染が起こらないようにしなければなりません（例：FIV抗体陽性猫に使用した手術器具の消毒など）。

## ワクチン接種の推奨

- ヨーロッパでは現在のところFIVワクチンは市販されていません。
- 健康なFIV抗体陽性猫には通常の病原体に対するワクチンの接種を検討する必要があります。しかし、疾患の症状が認められるFIV抗体陽性猫には推奨されません。



■ FIV抗体陽性猫（写真）も未感染猫と同じく長期間生存できる可能性がある



■ 慢性口峽炎はFIV感染に関連してよく認められる



■ FIV感染によって慢性感染症が起ることがある



■ FIV抗体陽性猫の体重減少と出血性腸炎



■ 検査結果がFIV抗体陽性というだけで、猫を安楽死させてはならない